

沼津市若山牧水記念館

第45号

2010.9.15

編集・発行 沼津牧水会 TEL・FAX 055-962-0424
〒410-0849 沼津市千本郷林1907-11 http://web.thn.jp/bokusui/

しるし

「酒の葉の茂みがうへに登りてこれの小蟹はものたべ

最後の歌

牧水没後に発刊された最後の歌集『黒松』の末尾に、「最後の歌」と題して次の二首が載せられている。

酒ほしさまぎらはすとて庭に出でつ庭草をぬくこの庭草を

芹の葉の茂みがうへに登りてこれの小蟹はものたべてをり

「酒ほしさ」は、歌誌『創作』昭和三年六月号の裏表紙の欄外に書かれていた作品であり、「芹の葉の」は、牧水が短歌を書き記すために購入した「ノート」の三十四ページ目に一首だけ書かれていた作品である。（この『創作』と「ノート」は若山家の所蔵で、『創作』は生地宮崎県日向市東郷町の若山牧水記念文学館に、「ノート」は本会に寄託されている。）

「ノート」は、A5版の二百八十ページ程の分厚いもので表紙の見返しに「昭和二年十二月二日求之」と書かれている。各ページに四〜五首の作品が書かれ、推敲のあとが細かく残された貴重な記録である。

「芹の葉の」は、制作日が七月廿九日と記してある。「酒ほしさ」と「芹の葉の」のどちらが最後の歌かを詮索する向きもあるが、両方とも最後の歌ではないかと思っている。

歌誌『水薺』の代表であった高嶋健一氏は、この「芹の葉の」を牧水の最高傑作と言われた。私も「幾山河」をはじめとする初期の『別離』に載る多くの秀作、「山桜の歌」を代表とする円熟期の作品群を措いて、牧水の到達点の作品としてこの「芹の葉の」を択ぶ。

体力の低下を憂い、友人たちに心細さを訴えていた牧水の生きる姿勢の発露として、芹の葉の上において一心にもものを食べている小蟹の姿から生きとし生けるものの真摯さが強く迫ってきたに違いない。この小さなものにひたすら近づき、その純粹性の中に、生きるという真の姿を見出したのではなかるうか。そして、それを素直に小蟹の描写に徹したところに牧水の到達点を感じるのである。

「ノート」に書かれている一三八首のうち、歌集『黒松』に「合掌」と題して収められた三首の「酒の歌」を紹介する。妻が眼を盗みて飲める酒なれば惶て飲み噎せ鼻ゆこぼしつ

うらかなしはしためさへ気をおきて盗み飲む酒とわがなりにけり
足音を忍ばせて行けば台所にわが酒の壘は立ちて待ちをる

牧水は、冒頭の二首を残して九月十七日に亡くなった。「芹の葉の」の歌につづく真白な余白を見ると、牧水の早世を悼み、牧水の無念の思いを察するものである。（須永秀生）

旅人ふたり

日高堯子

牧水の紀行文集『新編 みなかみ紀行』（池内紀編 岩波文庫）を読みながら、信州や上州の山道を、あるいは熊野那智山への雨の道を、牧水の後ろ姿とともに歩きはじめたわたしに、いつよりか後になり先になりして見えてくるもう一人の旅人がある。釈道空である。二人は同じ頃、同じような道程を行く旅人であった。



『海やまのあひだ』
(大正14年 改造社)
(高知県立図書館提供)



『新編 みなかみ紀行』
(平成14年 岩波文庫)

たとえば牧水は、大正十一年（一九二二年）の十月十四日から十一月五日にかけて、信州・上州の旅をしている。信州軽井沢から草津、花敷温泉、四万温泉と歌の友の消息をつたうようにして山間の道を歩きつづけ、上州の沼田、猿ヶ京村、老神温泉を経て、金精峠を越えて日光に至っている。途中、吹割の滝や赤谷川、片品川の源流を見とどけ、「みなかみ紀行」となった旅であった。

一方、道空とはいえ、それより二年ほど前の大正九年七月十四日から二十五日にかけて信州・三河・遠州の旅をしている。美濃の中津川を出発して、信州波合、新野、遠江奥山、山住、松峯を経て、大井川・薬科川へ通じる道歩き、静岡に出たのである。山間部をたつた九日間歩き徹したこの旅は、道空によほど深い感銘を与えたのであろう。第一歌集『海やまのあひだ』の「夜」「木地屋の家」「供養塔」など多くの歌を生み、道空の独自の世界を人々に鮮烈に記憶させることになった。

むろん二人が同じルートを辿ったわけではない。だが、牧水の旅も道空の旅も、ともに人里離れた山道を自らの脚でひたすら歩く旅であり、悪路や悪天候によって体力の限界にいくたびか

さらされながら、稀有な風景と出遭う旅であった。そしてどちらの旅も歌と深くかかわっていた。

生涯を通して同じように旅に過ごした牧水と道空には、他にも熊野、和歌山、東北など類似する旅程は多い。だが、いうまでもないが、彼らが旅に発見するものは、それぞれまったく別のものであった。

*

牧水の紀行エッセイのなかで、文章がひときわ躍動、昂揚するのは、旅の道中で彼の五感が鳥の声と水の響きに触れたときである。まず「山上湖へ」のなかの〈鳥〉をめぐることなくだりを読んでみる。

二つの声（郭公と杜鵑）は、一つは近く一つは遠く、時にはかたみがわりに、時には同時に、間断なしに聞えて来た。何ともいえぬ静寂と光明とがその声に聴き入っている私の身边をしつとりと包んで来た。山はただその鳥の声のためにかすかに呼吸づき、ひそまり返っている四辺の松の木はただそのためにほのかに光を放っているようにのみ私には思われて来た。ああ、鳥は啼く、鳥は啼く。

私の心が空虚になる時、私の心が渇く時、彼らは啼いた。私の心がさびしい時、あこがれる時、彼らは啼いた。私の心が何かを求

めて動く時、疲れて其処に横わる時、彼らは私と同じい心に於て私の心にそのまことの声を投げてくれた。それら私の心の親友どもは、いま、明るい日光の、匂い煙る松の林の、こうしている私の眼の前で声を揃えて啼いている。ああ、まことに啼いている。

伊香保から山上の湖に向かう山中の牧水に、郭公、杜鵑の鳴き声がいっせいに降りかかってくる。「くわつくわう、くわつくわう」「ほったんかけたか、ほったんかけたか」。鳥の声は耳から直接に脳に、心に響きわたり、飢する。その声に鋭敏に反応した肉体は、たちまち昂揚し、流離し、あたかも同化するように透明になっていく。そうして現実から解き放たれ、非社会化された牧水の精神は、「静寂と光明」といういわば山のエロスに包みこまれるのである。その果てに、「ああ、鳥は啼く、鳥は啼く」という詠嘆しなくなるのは、むしろ当然のなりゆきだろう。牧水はまた、「久しく忘れていた『自分』というものに思わずも邂逅つたような哀しさ楽しさを沁々と身に覚えた」とも書いているが、この「自分」にこそ牧水の秘密のすべてがあると、いつていい。

〈鳥〉をめぐるこの文章の後には歌はない。だが、鳥の声との感応を官能的にまでに記したこのくだりは、いかなればそのまま歌であり、牧水の歌の本質もまさしくここにあろう。

さて、もう一つの〈水〉をめぐる、「みなかみ紀行」からこんな記述を拾ってみる。

私は河の水の上というものに不思議な愛着を感じる癖を持っている。一つの流に沿って次第にそのつめまで登る。そして峠を越せば其処にまた一つの新しい水源があつて小さな瀬を作りながら流れ出している、という風な処に出会うと、胸の苦しくなるような歓びを覚えるのが常であつた。

片品川峡谷の眺めはやはり私を落胆せしめなかつた。……(略)……山が深いため、



吹割の滝 (群馬県片品村)

紅葉はやや過ぎていたが、なお到る処にその名残を留めてしかも岩の露われた嶮しい山、いただきかけて煙り渡つた落葉の森、それらの山の次第に迫り合つた深い底には必ず一つの溪が流れて滝となり淵となり、やがてそれがまた随所に落ち合つては真白な瀬をなしているのである。

私は路ばたに茂る何やらの青い草むららを噴きあげてむくむくと湧き出ている水を見た。老番人に訊ねると、これが菅沼、丸沼、大尻沼の源となる水だという。それを聞くと私は思わず躍り上つた。それらの沼の水源といえば、とりも直さず片品川、大利根川の一つの水源でもあらねばならぬのだ。ばしゃばしゃと私はその中へ踏みこんで行つた。そして切れるように冷たいその水を掬み返し掬み返し幾度となく掌に掬んで、手を洗い顔を洗い、頭を洗い、やがて腹のふくるるまでに貪り飲んだ。

〈水〉への深い愛着と憧れ、その〈水〉をみつめる強い視線と詳細な描写力、そして最後の〈水〉との感応と歓喜。三つの文章には牧水のいわば水恋の姿が、あますことなく映し出されている。二つ目の片品川峡谷の記述のあとには、「歩一歩と酔つた気持になつて書きつけた」という十五首の歌が並んでいる。

路かよふ崖のさなかをわが行きてはろけき
空を見ればかなしも

わが急ぐ崖の真下に見えてをる丸木橋さび
しあらはに見えて

岩蔭の青渦がうへにうかびるて色あざやけ
き落葉もみぢ葉

苔むさぬこの荒溪の岩にゐて啼く鶺鴒あは
れなるかも

どの歌にもなだらかな韻律のなかに透明な抒情が沈んでいる。奇を銜う表現も発想もなく、平明な景の描写に「かなし、さびし、あはれ」という単純なまでに純一な詠嘆が結びついていく。そして同時に、これらの歌は、歌という形式がいかに写生に不向きであるかを知らしめる。先の散文を読んだ後では、これらの歌はあまりにも穏やかすぎ、詠嘆すぎるからだ。景の描写も心の陰影も散文の方がずっと鮮明であり、執拗であり、力があると感じるのはわたしのみではあるまい。だが、おそらくそれは歌の任ではないのだ。単純こそ歌の大いなるいのち——とすれば、歌の形では書き切れないものを、牧水は紀行文という形で記したともいえようか。

逍空の旅は、いくなれば山間の民間伝承採訪の旅であった。それゆえ旅の記述も学問的なものであつて、歌そのものに託したのも、単純

な山河の写生や抒情ではすまない。

山々をわたりて、人は老いにけり。山のさ
びしさを われに聞かせつ

沢蟹をもてあそぶ子に、銭くれて、赤きた
なそこを 我は見にけり

人も 馬も 道ゆきつかれ死に、けり。旅
寝かさなるほどの かそけさ

ゆきつきて 道にたふる、生き物のかそけ
き墓は、草つゝみたり

逍空の思惟世界を象徴する「ひそけさ、かそけさ」について、ここで十分に述べるゆとりはないが、「さびし」という言葉一つをとつても、牧水とは表情が違うことに気づく。逍空の見つめているものは、たんに山や溪谷の絶景ではなく、人間の生きていく景であり、古代から日本人がいのちを繋いできた思想としての風景であろう。いわば時間の旅人として、木地屋の山人を、沢蟹をもてあそぶ子を、旅死にの人や馬の墓を尋ねる。そこで生まれる思いは相反する二つのもの、彼らへの共生感と、彼らからの孤立感である。逍空の歌は、この二つのせめぎ合いの間にあつた。

終わりの二首には「殆、峠毎に、旅死にの墓がある。中には、業病の姿を家から隠して、死ぬるまでの旅に出た人などもある」という詞

書がついている。そういえば、牧水の「みなかみ紀行」のなかにも、業病の人や警女との出会いが書かれていた。ただし、牧水はすれ違つたのみで、彼らについての深い思索や記述を残してはいない。こんなところにも牧水と逍空の違いは歴然としている。

だが、それにもかかわらず、わたしはこの二人の旅人を並べてみた。彼らの違いの底に共通しているのは、風景が木や水や岩に投影された人間の想像力そのものであり、深い記憶の比喩であるという思考にほかならない。「近代人」とつての「風景」の意味がここにみえている。



「筆者プロフィール」ひたか たかこ

昭和二十年、千葉県夷
隅郡中川村(現いすみ市)
生れ。早稲田大学教育学
部国語国文学科を卒業。
市川市在住。昭和五十四
年短歌結社「かりん」に
入会。第五歌集『樹雨』

で日本歌人クラブ賞、河野愛子賞受賞。作品『芙蓉と葛と』三十首により短歌研究賞。第六歌集『睡蓮記』で若山牧水賞を受賞。歌集に『野の扉』『牡鹿の角』『幾月もゆら』『玉虫草子』『日高堯子歌集』、評論集に『山上のコスモロジー——前登志夫論』『黒髪考、そして女歌のために』。今春開催した第二十一回「雌の歌会」の講師。